

「敗戦の日」をあらためて考える!!

沖繩平和式典の訴え「生きる」から

戦後73年目の「敗戦の日」を迎えるにあたり、過日開催された「沖繩慰霊の日」の式典(6月23日・沖繩県糸満市平和祈念公園)と重ねて考えてみたい。

当日、会場の演壇に立ったのは自作の詩「生きる」を読み上げる浦添市立港川中学3年の相良倫子(さがらりんこ)さんである。相良さんは訴える。「私の愛する島が、死の島と化した」その戦火は「家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。仕事があった。生きがいがあった。日々の小さな幸せを喜んだ。手をとり合って生きてきた私と同じ人間だった。それなのに。壊されて、奪われた」と73年前の沖繩を訴えていた。平和祈念公園の丘に吹く風は、相良さんの髪をなびかせセーラー服の襟がはためいていた。彼女は一度も原稿に目をやらない。自らの思いを託した詩なのだからすべて暗記していた。そして詩は続く。「私は手を強く握り、誓う。奪われた命に想(おも)いを馳(は)せて、心から、誓う。私が生きている限り、こんなにもたくさん命を犠牲にした戦争を絶対に許さないことを」と。

この詩の朗読に私は心を揺さぶられた。そして私のもう一つの記憶に15年前の広

島平和記念式典で訴えた小学校6年生の少女少年の姿と「平和への誓い」がある。

「人間を返せ」の朗読に心からの声援

1950年6月から始まった朝鮮戦争で、核兵器の使用を検討していた米国に対し「原爆詩人・峠三吉」は抗議の原爆詩「人間を返せ」を発表した。会場で「平和の誓い」を読み上げる小学校6年生の片岡瑞希(かたおかみずき)さんと藤井博之(ふじいひろゆき)さん。「一発の原子爆弾は、明日に向って懸命に生きようしていた人々の望みや願いを一瞬にして奪い去った」と述べた。その後、二人の口から飛び出したのが「人間を返せ」の朗読であった。

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ こどもをかえせ

わたしをかえせ

わたしにつながるにんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを へいわをかえせ

私は一瞬この映像は間違っではないかと疑った。なぜなら二人の少女、少年が読みあげた詩は、当時の教科書から消され、「原爆の火」に焼かれて倒れる少女に涙を流す「怒り地蔵」という絵本も「夏休みの友」から消された。

政治の圧力が教育まで及び始めていた時代

である。にかかわらず公の場でのその朗読に驚いた。その原稿は所属校の教員の目にも触れていたであろう。親も承知をしていたであろう。にもかかわらず発表をしたことに国土空襲と敗戦を体験した者の一人として、二人の少女、少年に心からの感謝と激励を送りたいと思ったことを今も忘れることはできない。

「対話を通してこそ戦争は回避できる」

「殺しあう戦争」は今なお世界の各地で展開され、あの大战で30万を超える犠牲を出し、今なお癒えぬ惨禍を残している日本である。しかしそれを忘れたかのように、安倍政権は自衛隊の海外での武力行使を容認する憲法解釈を強行した。それだけではない。北朝鮮の危機を煽り、対ミサイル防空演習を全国各地で展開させ、「米朝・共同声明」を非現実と断言し軍事力の増強を進めている。

しかし、トランプ大統領は「交渉が順調に進んでいる間はウォー・ゲーム(軍事演習)を行わない」と表明。さらに新しい在韓大使に任命されたハリー・ハリス前・米太平洋軍司令官は、上院外交委員会の公聴会で北朝鮮情勢は「首脳会談後に状況が劇的に変わった」と指摘し北朝鮮の非核化への行動は対話を通して促すべきと述べている。

日本は、とるべき道を誤ってはいけないと思う。

(文責・降矢・通敦)



「官僚言語」を知って

ニュースを見よう

「お答えを申し上げます。先ずは近年のサブプライムを端緒とします世界同時株安に對しまして、内外のシンクタンクが様々なスキームで対応しておるといふことは公知の事実であろうかと存じます。そこで政府と致しましては、マスタープランの作成が喫緊の課題であろうかという風に考えておるところで御座います。及的速やかな解決に向けまして、引き続き鋭意努力して参る所存であります。――中略―― いずれに致しましても各方面と対応を協議するなど、情報交換や解決に向けた連携を図りながら所要の対策を講じて参りたい。こういう風に考えておる次第で御座います」

このような言葉の羅列はどこかで聞いたことがある。つまり行政側にとつて都合の悪い事柄が市民に知られたくない。そこで一般市民の思考を制限するため何を言っているのかわからない「官僚言語」を用いる。そして直近の事例として、加計学園問題をめぐる柳瀬秘書官の発言を取り上げてみる。柳瀬秘書官は野党の追及に對し「記憶の限りではお会いしたことはありません」と答弁。しかし、愛媛県の官邸訪問の文章が明らかになるや柳瀬氏は「面会を認める方向で調整中」という言語を用いた。「記憶の限り」「その方向で調整中」という言語をどのように解釈したらよいのだろうか。私たち市民が理解できない言葉を使って逃げ切ろうとする。国民を馬鹿にするの

もいい加減にしてほしいものである。

そこで、よく私たちが耳にする幾つかの官僚言語を取り上げてみたい。

◆は官僚(政府)の答弁・★はその真意。

◆「そのようなことは記憶にございません」

★指摘されたが後で問題にされると困る時に使われる。

◆「〇〇対策については善処してまいります」

★やる気はないが、そう言うと相手が怒る場合があるのでとりあえず使っておこう。

◆「ご批判をふまえながら粛々と進めてまいります」

★悪い点が明らかになっても、変更をせずに予定通りに進めていく。

◆「ご指摘の対策は可及的速やかに実施してまいります」

★そんなに急ぐ必要はないと判断しながらも、そうは言えないのでとりあえず。

◆「このような事態を招いたことを、重く受け止めています」

★悪い事態が起きた時や、批難された時に真剣に耳を傾ける姿勢を示した方が丸く収まる。

「ごまかしや論点のすり替え」を図る不誠実な政府の国会答弁のカラクリを暴く「ご飯論法」なるものがネットで注目されている。その投稿者は上西充子・法政大キャリアデザイン学部教授である。

はぐらかし・論点ずらし・そして数の横暴

ではこの「ごはん論法」で国会の質疑を再現してみよう。

――朝ごはんは食べなかつたんですか？

「ご飯は食べませんでした(パンは食べましたが、それは黙っておきます)」

――何も食べなかつたんですね？

「何とも聞かれましても、どこまでを食事の範囲に入れるかは、必ずしも明確ではありませんので」

――では、何か食べたんですか？

「お尋ねの趣旨が必ずしもわかりませんが、一般論で申し上げますと、朝食をとるとするのは健康のために大切であります」

このように政府(官僚)の答弁は、パン(事実)を食べたことを隠し通すための「はぐらかし」「追及かわし」「論点ずらし」の論法を延々と駆使し続ける。さらにそれを正当化するように「いつまでモリ・かけを引きずっているのか」との批判が、与党陣営と一部の識者やマスコミから発せられている。

それでは国民は「モリ・かけ」は解決済みと納得をしているのだろうか。とんでもない。与党支持者も含めてその多くは「ノー」である。

そして数の横暴をもって、説明のつかない法案の強行採決を図ってきたのが今国会の安倍政権である。民主主義はその政治決定の過程こそ大事にされなければならない。その原則を無くして民主政治は成り立たない。決して幕を下ろしてはならない。

その夜「赤坂自民党亭」では!!

西日本豪雨災害を「想定外」であり数十年に一度の災害であると論じられている。だがこの「想定外という表現」は今に始まったことではない、7年前の東日本3県を襲った「地震・津波・そして福島原発の破壊」というトリプル災害においても「100年に一度の災害、想定外のものであった」と称されてきた。

さて考えてみよう。地球規模を取り上げるまでもなく日本における自然災害の記録をたどってみる。およそ今から1149年前の平安時代869年の貞観地震がある。この災害がどのようなものであったかは『日本三代実録』という古代書にその時の模様が記されている。

『人々は叫び、倒れた人は起き上がることができない。家が崩れ圧死した者、地滑りや地割れで生き埋めになった者。その被害の多さは数えることができないほどだ』と。以来、多くの災害がこの小さな日本国土を襲い多くの人命と財産を奪ってきた。

さて「平成30年7月災害」と命名された今般の「豪雨災害」である。予想を超える、しかもかつての知識や経験が生かされない災害であったことは承知のところである。その洪水、土砂災害を「想定しなかったもの」として片づけられることがあってはならないことをまず強調したい。同時にその豪雨により親・兄弟・そして子どもの命を奪われた者にとっては、言いようもない怒りと不信を抱かせたものに、安倍首相を中心とした「和やか、楽しい会合」

の『赤坂自民党亭』の宴席があった。このことを中央紙、地方紙を問わず多くの新聞社が、しかも集合写真入りで報じられている。

その夜、現地においてはすでに「避難勧告」が出されていた。その宴席にいた与党の一部の幹部はあとになって「これほどまでの被害が生じるとは思ってもみなかった」と述べている。しかし、国民の、とりわけ被災した地域の皆さんにとっては、森友、加計、そしてセクハラ、買収と連続して発生させた政府与党と高級官僚のおごりと緩み、そして国民を軽視する政治姿勢と安倍首相自らの保身に結びつく醜態であると受け止めたことは否定できないと思う。

そしてもう一つの事例も取り上げる。その宴席の集合写真の中央に安倍首相と並ぶ上川法務大臣の姿があった。上川大臣は親指を「グー」とかざして笑みを浮かべている。国民を震撼させた「オウム殺人事件」である。当然重刑は免れない。そして刑を決した13名の死刑囚のうち7名の処刑が実施される前夜である。法にもとづくものとはいえ一度に7名と言う処刑は過去にはない。しかも国家が国民の命を奪う処刑は国際世論の中で疑問が提起されている。そして歴代の法務大臣の中で「死刑廃止・終身刑の採用」などを主張された経緯もある事案である。もちろん日本はそれを「法に定めている」そしてその決断をするのが法務大臣である。上川大臣も重い決断を心に秘め

その決断の印を押しただであろうその指で、グラスをつかみ「グー」と親指をかざし、笑みする姿にいぶかりを持った者は少なくなかったと思うが、どうだろう。そしてその20日後の26日、残りの6名の処刑が実施された。平成のことは「平成の時代に決着をつける」それだけのことなのだろうか。

深く考える必要があると思う。

【ニュースを読んで】



サッカーも暑く政界はヒンヤリ可笑しいです。W杯の乗じて逃げ切ろうとの魂胆ですか。今日も「母」の施設に様子を見に行ってきました。痩せてはきましたが冷房完備の施設で元気でした。こちらの方が参りそうです。今更ながら保険制度の有難さを実感しています。

原発の「廃炉」最終的な姿を見る事は現実的に無理ですが、色んな意味で若い世代に「負」を負わせることになるのでしょね。確かに「誘致」したと言う事は現実にはありますが、「まさか」言う「坂」があったと言う事で終わらせるのでしょうか。小生の知人に「双葉町」出身者がいます。あの時は町ぐるみで応援したんだよねと口惜しそうに言っていました。今更後戻り出来ない事も事実です。新潟も新知事が難しいかじ取りが有る様で大変です。益々色々暑くなりますがご自愛ください。

(Mさん・福島在住)

福島原発事故被災地見学報告No.3

ツアーに参加して

原発事故の罪深さを痛感する

岩下 潔さん（喜多方市）

東日本震災・第一原発事故から7年、居住制限区域と避難指示解除準備区域が解除され復興が強調されていますが、百聞は一見に如かず、ツアーに参加して目にした光景は7年前にタイムリップした事故後の町や村の姿でした。人のいない商店街・地震で壊れた家・カーテンをしめたままの空き家ばかり、以前「ゴーストタウン」と表現して辞任に追い込まれた復興大臣がいたが、私は大臣の言葉どおりだと感じました。

また、どの町村に行っても目についたのは広い敷地を白い塀で囲まれ、放射能汚染土が入った大量のフレコンパックが山積みされた仮置き場でした。浪江町の請戸地区、以前復興を願うサケの稚魚を放流する子供たちの姿をテレビで見ましたが行って愕然としました。そこは広大な草原地帯となり、残っているのは津波被害を受けた数軒の家と小学校校舎と仮置き場だけでした。この地区で5千人の方々が暮らしていましたが原発事故で強制避難させられ7年経っても放射能汚染により、元の生活に戻れず避難を続けなければならぬ人たちの心情を思うとき原発事故の恐ろしさ、罪深さを痛感させられました。

富岡町の坂本武蔵野園(牧場)に入る道路の

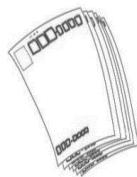
牧場側は帰還困難区域で立ち入り禁止。反対側は避難が解除された地域。牧場では坂本さんから事故時からの説明をして頂きました。ちなみに空間線量は2.7マイクロシーベルト。また走行した国道6号線の線量計は2.2マイクロシーベルトを示していました。

国は年間20ミリシーベルト以下という高い基準で帰還政策を進めているが、避難解除された地域ではすでに帰還を諦め自宅の取り壊しが進み更地が増加している。また近くに仮置き場があり放射能被曝に不安を感じる所に戻れるでしょうか。私には現在の国の帰還政策は被災者ないがしろにした「棄民」政策の危険を感じてなりません。

【寸描】

一枚のハガキが

意味するもの



朝早く目を覚ます。早朝3時ころからは私の耳にはイヤホンがついている。そしてある日の4時からの番組「明日への言葉」であったかと思う。最後に「永六輔さん」のことが紹介をされた。永さんは、市井の人たちとの交流を欠かさず年間300日は地方行脚を続けていた。そして亡くなった後、自宅から発見されたのは市民たちと交わっていた10万通もの手紙である。『見上げてごらん夜の星を』。永さんがこの歌詞をつくったのは、高度経済成長期、都会に上京をしてきた若者たちを、『もなき星』と親しみを込めて呼んでいた。そして永さんは仕事の合間をぬっては1日100通

以上の返事を書いて「散歩に行くときには、脇にたくさんのハガキを抱えてポストに投函していた」と孫の永拓実さんは述べている。

そして私は「故灰原茂雄さん」のことを思い出す。三池炭鉱労働組合の書記長を務め、1959年、60年の三池争議を指導され、全国炭鉱労働組合(炭労)の事務局長となった。

その灰原さんの机には三池労組の仲間皆さんの名簿がある。灰原さんの一日の終わりは名簿をめくりハガキにあて名を書くことから始まる。「Sさんには年老いた親がいたはずだ。病気などで出費も重なっていないか」「Aさんには今年度高校卒の息子がいたはずだ。就職は決まったろうか」などなどの想いをめぐらして送り文を書く。親の病氣、息子の就職などの機会を会社の職制は見過ごすはずはない。必ず「相談に乗る」と言って言葉をかけるだろう。そして組合の脱退を勧めるだろう。現地を離れている灰原さんのオルグは一枚のハガキにその思いをにじませることにある。

機会があつて、私は長年灰原さんとの交流は続いた。自分の想いを仲間の想いに重ねる。永さんも、灰原さんもそのことでは一致していたのだと思う。学びたいと思うが簡単ではない。習慣となった「深夜放送」も80を超えた私に多くのことを教えてくれることを報告したい。(降)

【川柳・詠み人紹介】服部 靖男さん
社民党党员・全通退職者組合員 享年79歳